

術後深部静脈血栓症のスクリーニング超音波検査で偶然見つかった医原性仮性動脈瘤

◎橋爪 日花里¹⁾、山田 萌々華¹⁾
一般社団法人 巨樹の会 新武雄病院¹⁾

【はじめに】当院では、平均 270 件/月の下肢静脈エコー検査を行っており、そのうち約 45%が整形外科の患者である。整形外科の下肢の手術の場合、術後 1、3、7、14 日目に検査を実施している。今回、右膝人工関節置換術（以下 TKA）後の深部静脈血栓症（以下 DVT）スクリーニング検査時に偶然発見された医原性仮性動脈瘤を経験した。

【経緯】83 歳男性。右変形性膝関節症の TKA 施行。翌日、術後 1 日目の DVT スクリーニング検査において、偶発的に 32×12mm の仮性動脈瘤が見つかった。この際、疼痛やしびれの自覚症状は認めなかった。その後、エコー下にて動脈瘤の位置を確認しつつ止血デバイスを装着して圧迫止血を施行した。この時から圧迫による疼痛を自覚していた。翌日、下肢エコー検査において再度 17×16mm の瘤構造と流入血管を認めた為、造影カテーテルを施行し動脈瘤を評価後、他院に紹介になった。血行再建の適応と判断され、同日緊急で直接動脈形成術が行われた。術後は、転院時に自覚されていた疼痛は消失し

た。

【考察】本症例は、術後疑われていなかった仮性動脈瘤を DVT スクリーニング検査によって偶然発見することが出来た一例である。本来ならば患者が疼痛やしびれを訴えていなければ検査を行う事はないが、当院での整形外科の術後 DVT スクリーニング検査の取り組みにより、早期に発見し速やかに治療へつなげることが出来た。今後も、整形外科の手術後の下肢エコー検査においては、手術部位を注意深く観察する事が重要である。

【結語】膝窩動脈瘤は破裂や血栓性閉塞などの合併症を生じ、下肢切断や神経麻痺に至ることもある為、早期に発見する事が重要である。TKA 術後の動脈系合併症の発生頻度は 0.17%でありその中でも仮性動脈瘤を生じる頻度は 11%と低い、合併症として念頭に置くべきである。今回のように、術後 1 日目に下肢静脈スクリーニング検査をすることは、DVT が原因の肺塞栓症の予防だけでなく、下肢動脈疾患の早期発見にも有用である。

連絡先：橋爪 日花里 080-8388-0898